

質疑応答

司会（五十嵐） どうもありがとうございます。これからフロアの方々からご質問いただいて、あとで回答していただくことにいたします。お2人のコメントの中では、どなたに対して何をという形での明示的な質問は、あまりなかったような感じがします。ただ、和田先生のコメントでは、フィリモノヴァさんの報告に対して、「小さな勝ち戦」という言い方は正しくないのではないかという指摘がありました。当時、ロシアは戦争を回避したいと思っていたのではないかという質問です。そうなる戦争がはじまった責任はどこにあるのか、日本が悪いのかという議論につながってくると思います。

それからソク先生のご報告に対しては、全体として何を明らかにしたいのかが、今ひとつはっきりしないというご指摘がありました。それとの関連で漫画で表現する場合、「朝鮮のイメージはいいというふうなものになるのか」という質問がありました。それから、「ロシアは韓国に同情的であった」というご指摘もありました。これらについてソク先生はどうお考えなのかということです。

それからユ先生へのご質問で言えば、韓国における日韓戦争の研究動向はどうなっているのかということです。これはあとでフロアからの質問と併せてお答えいただければと思います。

梅田さんの報告と坂本先生の報告については、プレハーノフの議論や当時の戦争反対論との関連で、和田先生の方から、敗戦主義と国際連帯との矛盾をどう考えるかという問題提起があったと思います。“絶対平和主義”と言いますか、戦争をやってはいけないということと、植民地からの解放のチャンスを作り出すものとして戦争を捉える、あるいは革命運動を激化・発展させるためのチャンスとして戦争を考えるということとの関連です。後者は、必ずしも戦争そのものに反対するのではなく、自国の敗北なり帝国主義的な枢軸国の敗北を通じて、新しい政治的現実を目指すという別の目的の方を優先するわけです。それを反戦論として捉えるのかという議論も出てくるだろうと思います。

サルキーソフ先生に対する質問かどうか分かりませんが、ニコライ2世の決断力という問題もあります。かなり譲歩を考えていたということですが、最終的に優柔不断であって、戦争を回避できなかった。ということであるならば、何らかの形での決断がなされていれば戦争は回避されたのか。つまり、ニコライ2世の優柔不断や決断力のなさとは無関係に戦争になったのではないか、という意味合いの質問があったかと思います。

ユ先生の方では、誰にとっての平和なのか、日韓の平和ということは、つまり現状維持ということで、これは朝鮮の現状が維持されるだけではないのかという問題提起があったように思います。朝鮮の中では「日本は仲間だ」という捉え方があり、「ロシアと戦うなら、日本に味方しようじゃないか」という議論もあったというご指摘です。このへんをどう考えるのかということについても、



あとでお答えいただければと思います。

以上のような問題を念頭におきながら、これから出されるフロアからの質問を加味して、あとで順番にお答えいただくことにしたいと思います。

それでは、フロアからの質問を受け付けますが、

最初にお名前と所属を明らかにした上で、誰に対する質問かということがはっきりしているようでしたら、どなたに対してということで、ご意見なりご質問なりをおっしゃっていただければと思います。はいどうぞ。

質問者 今は定年退職中で、“毎日が日曜日”のような生活をしています。まず、フィリモノヴァ先生に対する質問です。ロシアの極東政策が日ロ戦争になったというタイトルですが、最初、ロシアはオスマントルコの弱体化で東方問題が起きて、イギリスとフランスに負けて、結局、南進政策を極東の方に向けた。その結果、日ロ戦争になったということで、清朝が弱体化していったところにつけこんで、ロシアが東進していったという面もあると思います。

もう1つは、2つの大戦があったからこそ、有色人種の植民地の解放が実現したということは事実だと思います。一概に戦争が悪いというのではなくて、2つの世界大戦で“狼どうし”が殺し合いをして、結局、有色人種の植民地が解放され、独立したという経緯があります。それからもう1つは、イタリアはオーストリア、フランス、ドイツの力関係をうまく操って独立したという経過があったということです。

そういうことで、ロシアの極東政策の結果として日ロ戦争になったということ、最初はバルカン半島で、イギリスとフランスがぶつかって食い止められたために極東に行った。ロシアとしてみれば食い止められてしまっているのではないかと……。

司会 つまり、戦争回避ということはあまり考えていなくて、不凍港を求めての南下政策が成功しなかったから、東の方に向かったのではないかというご質問ですね？

質問者 そうです。もう1つは戦争というものに対して、力関係を利用して独立運動が多発したということでユ・ヒョジョンさんに感想をお伺いしたいということです。

司会 戦争も植民地解放などの結果をもたらすという意味があったのではないかという質問です。他にありますか？できるだけ簡潔にお願いします。

質問者 仕事は現職の会社員です。残念ながら、世界の人気投票ではロシアはまだまだ駄目で、一番人気があるのはアメリカかなと思います。その原因を探っていくと、まず第1点は、戦争の時にシベリアで強制労働させられたということです。それと日ソ不可侵条約を破って、大量の抑留者を出した。満州の悲惨な状況が続き、今も孤児がいますが、そういう事実があったということが、現在のロシアで正しく伝えられているかということです。どなたでもいいのですが、ロシアの国民

の中でそういう状況が伝えられているのかどうか、教えてください。

それから、コンスタンチン・サルキーツフ先生。北方領土の問題、戦後60年経ちますが、全然解決していないわけです。歯舞、色丹を先に返すとか、四島一括でないとかで、全然解決していません。今回、プーチン大統領も、経済問題が大事だといってトヨタの工場ができたお礼という感じで来て、帰ってしまったというような状況です。結局、ロシアの国民が納得しているのかどうかということです。例えば日本の教科書を見ると、歯舞、色丹は日本の領土になっているのです。日本のみなさんは、そういうふうに日本の領土だと考えていて、ロシアはロシアで「ロシアの領土だ」と言ったら、全然解決しないと思います。1875年に千島を交換条約で結んで、これは日本の領土なのです。個人的に言うと、「何で四島なのか？ 千島一括ではないのか？」というような認識があるわけです。「四島ではなくて、千島全体じゃないの？」ということです。だから樺太と交換したわけですよ。

司会 簡単をお願いします。

質問者 そのへんのところ、教育の問題も含めて、見通しはどのようなかということを知りたいということです。以上です。

司会 それではどうぞ。

質問者 広島市立大学のミハイロヴァと申します。簡単な2つの質問があります。1つはフィリモノヴァさん、最初に日本語で言って、ロシア語で言います。

日ロ戦争が始まったとき、ロシアではかなり愛国主義運動がありました。この問題についての資料を、ロシアの資料館で探そうと思ったけれど、失敗しました。この愛国主義運動は、どれくらい自然発生的な愛国主義の表現であったのか。あるいは、これは政府とかプレーヴェの宣伝の結果であったのか、これについて、どこで資料を見つけることができるかという質問です。

もう1つは、質問というよりも、和田さんのコメントに対するコメントかもしれません。私はいつもイメージの立場から勉強してきましたが、今日の素晴らしい報告のようにイメージは国際的です。ですから、イギリスや日本でも、同じように理解できます。ソク先生のアプローチはもっと面白い展開が可能なのではないか、全世界におけるパワーゲームを目に見えるように示すことができるのではないかということです。例えば授業の時に、このような風刺画を使いながら、イメージによってパワーゲームについて教えた方がいいのではないかとということです。だから、とても分かりやすかったです。

ちょっと小さな質問です。日本は鬪鶏として表現されていますが、日本の風刺画で朝鮮は鬪鶏として表現されているのか、何かの説明があるのかということです。

司会 他にいかがでしょうか。はい。

質問者 宮城県の中学教師をやっています近藤と申します。日ロ戦争の結果と認識に関してです。領土の問題として千島の問題が出ています。現在の義務制の教育、高校では、サハリン島南部が領土未確定の場所として教えられています。それについてロシアの教科書ないしは歴史書で、どう伝えられているのかという質問です。フィリモノヴァさんとサルキーツフさんの見解をお伺いします。

司会 あとお1人くらい、梅田さんなどについての質問があれば……。

質問者 資料館の吉村と申します。2つ質問があります。1つは梅田先生にお願いします。先ほどの貴重なご報告で、矢部喜徳とか反戦平和論者が果たした役割のように、個人のあまり有名でない活動家とか思想家が、まだたくさんいたのではないかということです。日清戦争の時に、平和主義や社会主義とキリスト教がだんだん結合し、戦争反対の力になったのですが、間もなく社会主義とキリスト教が分離してしまいます。その後、日本政府の弾圧によって、平和主義思想が全く崩れてしまう。民衆の間には、戦争に対する嫌悪感、反対の気持ちはずっと潜在的にはあったと思いますが、そういうものがなぜもう少し有効に働かなかったのかということです。例えば、日本の仏教徒の間にもそういう平和思想は、ある程度あったのかどうか、まずお伺いしたいと思います。

現在につながる平和思想が切れ切れで続いているのですが、明治の末年から大正期の思想において、トルストイの平和主義思想は非常に大きな役割を果たしたと思うのです。それがいつの間にか、白樺派の運動も後半から消えてしまう。ロシア思想の影響が、明治の末年から大正の中期くらいで途絶えてしまうのです。こういうことの意味を、もう一度捉えなおす必要があるのではないかと思います。

もう1つはちょっと大きなことで、先生方にお考えいただきたいということで、要望だけ言っておきます。私は日清戦争と文学に関心を持っていますが、そういうことを考える時に、日本の文学者の代表的な人ばかりを集めて、その人たちの戦争との関わり合いだけを研究しているというのは、片手落ちではないか。庶民がどういう形で戦争に関心を持ったかということで、広い意味での文学とルポルタージュまでも含めた新しい研究がなされてしかるべきではないかと思います。

また、ロシアにおいてもいろいろな戦争文学がありますが、そういったもののロシアにおける影響というか、戦争文学をロシア側でどういうふうに使っているのかという問題です。われわれがロシア文学史などをざっと見ても、そういったことについて触れているのはほとんどないので、そういう研究についてお伺いしたいと思います。

司会 多岐にわたって、さまざまな問題についてのご質問をいただきました。報告とは逆に、サルキーソフ先生から、答えられる問題について答えられる形でお答えをいただくことにします。もし、あとで時間がありましたら、再質問という形にさせていただきます。報告とは逆にお答えいただくということで、よろしくお願いします。

サルキーソフ 質問はいくつかあったのですが、いちばん簡単なものを1つ。幕末の時代に北の方からの脅威が生まれてきました。おそらくこれはレーザノフの事件ですが、ロシアの2隻の船が日本人の集落を攻撃して、非常に乱暴で、略奪したり強盗したりした事件がありました。ただ、レーザノフの動きで何が大事だったかというと、ロシアの皇帝の信書を持って長崎に来て6ヶ月以上待たされ、返事はイエスもノーもない。誰かに言われたようですが、日本と貿易するためには圧力をかけないといけない。平和的な姿勢では駄目だ。脅迫すればどうかということです。ご承知の通り、日本は鎖国でしたが、その国を開くための最初の試みだったのです。2隻の艦長の2人は軍事裁判にかけられました。

ニコライ2世の膨張の戦略はあまり成功しませんでした。満州、朝鮮、ベルシャまで行って、中国も分断し、チベットはイギリスにあげてもいいという趣旨の野心的な計画もあった。それは、つまり世界の分断なのです。ロシアにとっては、南も東も同じことでした。だから、それは二者択一

的ではなかったのです。

太平洋戦争で、スターリンが中立条約を破って参戦した動機は、戦争当事者になるためでした。日本は負けていたので、戦後のことを考えていたのです。これはやはり地政学的な配慮です。また、思想的な配慮でもあり、中国のこともあったかなという気がします。

次に、強制労働や抑留なども、大きな政治的問題です。抑留に関しては、エリツィン大統領が訪日したとき、6回陳謝したのです。天皇陛下の前で頭を下げて陳謝したわけです。1993年のことです。それが十分かどうかということは別ですが、陳謝したわけです。その歴史が正しく伝えられているかどうか。もちろん正しくは伝えられていません。教育啓蒙活動をしなければならないのです。ただ、ロシアだけではなく、日本でも啓蒙活動しなければならない。どうして千島が失われたかという真実を、日本国民に伝えなければなりません。つまり、ポツダム宣言で、日本の領土は四島だけとされたのです。誰がそれをやったのですか？ロシアだけではないですよ。アメリカもです。イギリスもです。一番、猛烈に反日的だったのです。だから、日本を四島だけにして弱体化し、小さいものにした。日本を大国にしないためにです。それを望んだのは、アメリカとイギリスでした。なぜかという、理由は明らかです。戦争でやられていたからです。よろしいですか？だから、スターリンだけではないのですよ。

ロシアの教科書では、千島もサハリンもロシアの領土ということになっています。プーチン大統領は「二島返還論」に踏み切ったのですが、今年の9月に、「この領土は国際法によってロシアの領土である」と述べました。ただ、これはテレビで答えたのですが、後に次のように言っていました。「ただ、これは問題だ。その問題を解決するために日本と関係を深め、受け入れ可能な妥協で解決すべきだ」ということです。お互いに矛盾しています。国際法的には、ロシアの領土であれば問題ないと思います。しかし、問題はあるのです。56年の日ソ共同宣言というのは義務なのです。だから、平和条約を締結すれば自動的に日本に返還すべきで、それは問題ない。ただ、それは政治との関わりがかなり濃くなってきます。残念ですが、こういうふうになっています。以上です。

司会 国民の捉え方という点では、どうですか？北方領土問題をロシア国民はどのように考えているかという問いです。

サルキーソフ 世論調査ではいろいろと結果が出てくるのですが、今の世代の8割は、「ロシアの固有の領土です」という意見です。千島はロシアの領土だったのですが、日本に譲っていた。戦争によって返してもらった。歴史の事実とは関係のないことです。

司会 分かりました。引き続いて坂本先生、いろいろ質問が出ました。プレハーノフの立場は、先ほどレーニンとマルトフの間ではないかという指摘がありました。どうでしょうか？国際主義と敗北主義との矛盾という問題もありました。

坂本 和田先生、日ロ戦争の時期では、プレハーノフとレーニンの立場は、戦争に関する方針では一致していたのではないのでしょうか？要するに、専制体制を倒すという目的に、戦争という事態を、ある意味では利用していくということです。これは積極的にそうするわけで、平和主義ということになると、積極的というよりは戦争に抵抗していく。そして、一定程度の政治的な均衡を保っていくという、自由主義的なところがあったと思いますが、プレハーノフについては、日ロ戦争の段階でははっきりと“祖国敗北主義”と言ってもいいような立場にあったのではないかと思います。

す。

司会 梅田さん、いかがでしょうか。

梅田 キリスト教の果たした役割とか、他には有名ではない人もまだいるのではないかとか、そんなことですね。矢部喜好は大変おとなしい人で、著作をたくさん書いた人ではないので、やっと今、知られつつあるという現状です。もっとすごい苦難の道歩んだ方がいらっしゃると思います、ご存知の方がいらっしゃるかと思いますが、灯台社の人たちです。明石順三夫妻です。この人たちは、本当に苦難の道を進んだのです。キリスト教の日本への受け入れは、やっぱり反体制として入ってくるのです。ご存知だと思いますが、江戸幕府がなくなったから、それでそのままキリスト教が公認されたかというところではなくて、「五榜の掲示」にキリスト教の禁止ということで浦上事件が起こったりするのが明治のはじまりです。例えばキリスト教系の学校がありますよね。小中高あるのですが、あれも宣教師の人たちが明治の初めに来て、塾みたいな形で子どもたちを集め、ある時には変な噂が流されて、生徒たちが全員いっせいにいなくなってしまうような苦難の中から、学校として成長していったという経過があります。

キリスト教徒は、社会運動の方にも大きな役割を果たしました。“キリスト教社会主義”という、1つの流派を生むわけですね。単純明快に申しますと、「あの世の幸せをこの世に」ということを掲げたキリスト教社会主義者たちは、大変たくさんおられます。明治期の新紀元の人たちもそうですが安部磯雄、石川三四郎などがいますし、大正期後になってもキリスト教の影響は社会運動に残ります。例えば、鈴木文治がキリスト教ですし、日本の農民組合の中心になった杉山元治郎と賀川豊彦という人たちも、キリスト教の影響下にありました。

矢部喜好は福島出身です。例えば熊本には熊本洋学校ができ、海老名弾正という大物がここから誕生し、キリスト教の集団が成長していきます。会津での矢部喜好への影響を考えてみますと、明治のこんな時期に、欧米のキリスト教徒が町の中を讃美歌を歌いながら歩くなんてことは普通は考えられないのです。何か共通点があるのではないのでしょうか。会津と熊本、これはどちらも佐幕派なのです。これは聞いた話で、会津出身の方がいらっしゃるならごめんなさいですが、会津に根っからいらっしゃる方は反中央の姿勢が強いという話を聞いています。やはり、会津の歴史と関係があるような気がします。

熊本は細川の佐幕派で、明治以降は苦勞する。会津の苦勞はみなさん十分ご存知だと思いますが、念のために言っておきます。松平容保、新撰組を率いていました。会津戦争で負けて、明治以後、容保自身は和歌山に送られ、容保の息子が旧家臣を連れて下北半島に移り、ほとんど島流しに等しいような苦勞をなめたとされています。

プライベートな話になりますが、私はその容保の子孫の松平勝男君と、親友に近い友人だった時期がありました。10年位前に、秩父宮妃殿下（勢津子様）がお亡くなりになりましたね。松平君はこの葬儀に呼ばれ、そのときに会津松平家の家系図が配られました。それを彼が見せてくれたのですが、やはりそれは容保から作成されていました。話を聞くと、昭和の初めに秩父宮妃になるのですが、その時に「やっと会津の朝敵の汚名が晴れた」ということで話題になったことがあるようです。

そんな苦勞をしまして、松平家は関西に移されるのですが、やっぱり会津の人たちは苦勞してい

る。そういう土壌が、反体制としてのキリスト教がわりとすんなり受け入れられたのではないかと想像しています。そういうことで、キリスト教が社会主義、社会運動で果たした役割は、これからはさらに検討されるべき大きな課題だと思います。

それから、トルストイなどのロシア思想の影響が消えるというのはどうでしょうか。まず、日本の総合的な状況では、大正の半ばまで、一番、青年たちに影響を与えたのはクロボトキンなのです。そういう意味で、ロシア思想の影響はつづきました。クロボトキンの『青年に訴ふ』は、当時の若き学生達必須の愛読書だったのです。例えば山川均、この人もクロボトキンの本をたくさん読んで、その本をベースにして自分の論文を書くという時期があります。そういうことでクロボトキン主義が青年達に影響を与えました。もう一つ例をあげますと、森戸辰男さんが森戸事件を起こすのですが、実はあれはクロボトキンの研究なのです。ちょっと読んでみると分かりますが、単なる学術研究ではなく信念の表明なのです。そういう影響が20年代半ば頃まで続き、決定的に分離していくのが20年の後半で、特に福本和夫の影響は大きいです。福本が出てきて徹底的に変えてしまう。そして福本イズムはコミンテルンによって批判されますが、実は、それは福本が退場しただけで、学生達に与えた影響は決定的でした。それが分水嶺となって、20年代後半には日本のマルクス・レーニン主義が全盛となっていくと、私は理解しています。以上です。

司会 ありがとうございます。それではソク先生お願いします。

ソク たくさん質問を受け、日本語でお答えできるのか、よく分からないのですが、努力します。和田先生のご質問は4つぐらいあると思います。

論文は多目的で、それで何を話したかということですが、コメントはすごく正確な指摘だったと思います。この論文の報告は最初は、講義のために学生に分かりやすく面白く国際関係を質問するために準備してきました。本を書いているときに、ある会議に招待され、早速、論文を作って報告することになりました。先生の指摘のように多目的なのですが、一番重要なことは、分かりやすく面白く挿画を紹介しながら国際関係を説明することです。なぜかという、帝国主義時代の国際関係と同盟関係はすごく重要なものだからです。〈力の論理〉が支配する時期ですから、国家の本能的な利害というものを露骨に表しています。これを説明しながら国際関係を説明するのが一番いいと思い、そういう作業を始めました。論文の結論はイメージ分析だけのことなのですが……。イメージ分析の中に国際関係が入っていると思います。

日清戦争の時期の〈パワーポリティックス〉ですが、実は、日清戦争の時ではなく、1890年末頃から1907年くらいまでの広い時期の研究をしなければなりません。全部書くのは大変ですので、イメージを通して簡単に結論を書きました。

2つ目は、朝鮮のイメージが人のイメージになっていることに対する質問でした。朝鮮のイメージを人として表している挿画は珍しいです。他のものは、例えばネズミとか、案山子とか、カニとか、日清戦争の時の *Der Floh* の挿画では、カニになっていました。小さいカニとか案山子とか、そういうものがありますし、もう1つ、人になった挿画は大韓帝国の皇帝高宗のイメージですが、これはすごく弱くて細い老人の姿で表しています。日本の挿画には、子供、案山子の場合が多い。フランスの場合には、盲人、日本風の女性としてよく登場しています。

イメージの問題について、フロアーのミハイロヴァ先生の質問と一緒に答えるとすれば、韓国の

場合、ニワトリのイメージはなかったと思います。ニワトリは日本のイメージです。いろいろありますが、人は少なく、昆虫とか小さい動物だけが、挿画に現れている朝鮮のイメージです。

3番目は、日清戦争前の交渉とか日清協約に対しての質問だと思います。これとロシアと韓国の関係についての問題です。私は、日清戦争に関して報告するのが、国際会議で今日が8回目になると思います。日清協約とかロシアの対韓政策とか、そういう報告を日本でもしたことがあります。簡単に言えば、日清戦争の前にも韓国に関しての協約が3回あり、日清戦争後には2回ありました。1910年に日本が韓国を併合しますが、そこに至る日清間の交渉で、ロシアはモンゴルを全部手に入れようと一生懸命交渉しますが、日本は「絶対にそれはできない」と何回も言いました。その代わり、日本は「ロシアがモンゴルを欲するのであれば、韓国の併合を承認しないとイケない」と言ったのです。そのために、日清協約がすごく難航するということがありました。

ロシアと韓国との関係ですが、この日清交渉と関わっています。ロシアは、ポーツマス会議が終わった後でも、韓国の独立方針を主張しました。日本はポーツマス講和で韓国併合についての承認を受けたと考えたのですが、実際にはロシアが介入し、独立、主権の問題を何回も提起しました。1907年のハーグ密使事件が代表的な例だと思います。

4番目の質問ですが、日清戦争の直前に韓国の皇帝は中立を宣言します。実は、これはバブロフ公使を通して中国のチェフで宣言したものです。皇帝は中立を宣言したけれども、実はロシアと親密な関係をずっと続けます。ロシアは日本に対して韓国の独立方針を主張しましたから、国際法がよく分からなかった韓国の皇帝高宗はロシアが韓国の独立を守ることができるかもしれないと考え、それに期待してロシアのニコライ2世に手紙を書いたり、メッセージを送ったりしました。ロシアの対韓政策が韓国の独立方針を主張していたため、表面的には韓国とロシアの関係が親密に見えたかもしれません。

最後に、韓国の日清戦争研究についてのフロアーからの質問です。おとといの木曜日に、韓国で歴史教科書問題に関しての会議がありました。発表された中学、高校の歴史教科書の中では、日清戦争とか日清戦争のことについてはあまり書かれていません。それは驚きです。なぜかと言うと、韓国近現代史の研究者たちは、民衆史や義兵運動、民衆抗争運動や独立運動などに偏っており、国際関係と関連して、日清戦争の意味とか、何で韓国が併合されたのかについては、あまり記述していません。それが一番大きな問題だという指摘がありました。

日清戦争や日清戦争は、韓国の問題を理解する上ですごく重要な問題で、それを客観的に分析するには国際関係の中に位置づけなければなりません。日清戦争の前には、清国との関係が重要ですし、日清戦争の後には日清関係の中で韓国の問題が扱われます。韓国の問題は、いつも複雑な国際関係の利害が衝突する狭間で生じていますから、ヨーロッパの国際関係とか同盟関係などとも関連します。だから、それらを全て視野に入れなければ、韓国の問題は本当には見えてこない。国際関係の中に位置づけて韓国の問題を見る西洋史研究者たちは多くありませんが、20年くらいの間に少しずつ増えてきています。

司会 ありがとうございます。最後、フィリモノヴァさんからお答えいただきます。一応5時半までということですので、あと20分ほど時間があります。その範囲で答えられる形で、お答えいただければと思います。

フィリモノヴァ プレハーノフは明らかに平和主義者ではありませんでした。また、戦争主義者でもありません。戦争中には、平和主義というのはいかなる意味があるのかということです。もう戦争が始まっていますから、平和主義ではどうにもならないのです。あまり具体的な実りはありません。プレハーノフは、道を歩いていて誰かが誰かを脅しているとき、その側を通っている人は「もうやめなさい！」と言って、両方を説得することは馬鹿げたことだということです。1人は犠牲者になっているのですから、平和主義というのには、戦争中にはちょっと意味がないとプレハーノフは言っていたわけです。

ちょっと聞き違っていたようですが、「小さな勝ち戦」というのはヴィッテではなくプレーヴェです。1903年12月と1904年1月、皇帝はニコライ2世で、非常に戦争に近づいていましたが、彼の影響力は皆無でした。彼は何もできなかった。できたのは、1898年、参謀本部のオーブルチェフ参謀総長から出された提案を読むことだったのです。その提案は、北満州とかを占領して、あとは全部日本に譲ってもいいのではないかとということです。特にオーブルチェフという人は、ヴァンノーフスキイという陸軍大臣の腹心の1人で、皇帝にも影響がありました。皇帝には1898年の時点で明らかに、ヴィッテが戦争なしで満州に平和的に侵入できるという提案を提出していました。そうすると、戦争ではなくて平和的な侵入です。ただ、やり方がまずくて、仕組みとか構想も欠陥だらけで、戦争になったということです。

次の質問はミハイロヴァ先生からいただいたものですが、愛国主義の爆発は、戦争の初期だけであつたということです。後にはあまりなかったのですが、それは、戦争のためにお金を集めるキャンペーンであつたと思います。ただ、一定の人たちだけが関わっていて、全般的ではなかったということです。これもお互いのイメージの関係もあつたかもしれません。つまりその一定の人たちが、日本は「極東地域におけるロシアの利益にとって一番脅威である」とか、「悪質な存在である」ということがあつたのかもしれません。だからこういう戦争が始まると愛国心の爆発があつたのですが、あとで消えてしまう。

ただ、皇帝の反応としては、日本が戦争に踏み切ったことを罰しなければならない。日本は自負心が強いということです。日本のことを軽視して、小さな戦争をすれば簡単に勝てるというムードがあつたかもしれません。私個人は、そうは思いません。全然違います。こういう気持ちはなかったのです。ただ、お金を集めるという運動は、ポーツマス講和条約まで2年間、ずっと続いていました。

その募金の運動の収支といいますか、どうしてお金を集めていたか。新しい軍艦を作るとか、軍事力を増やすためではないのです。奉天会戦とか海上でも敗北していました。ロシア軍は、非常に困った状態に陥っていました。だから普通の兵士の人たちが大変な状態だつたということです。例えば、食事もありないし、着るものもないとか、すごくみすばらしい状態でしたから、それに協力する、普通の一般の兵士とか水兵のためにお金を集めていたということです。ロシア人は何のためにロシア人が向こうへ行って死んでいるかということもあまり分からなかったのです。それはロシアの関心事ではなく、外国のことだということです。向こうに行って何のために戦死したのかということで、戦争自体が批判されていたのです。

ロシアの教科書には、南サハリンとか千島は全部、ロシアの領土の色に染められていますが、日

本の方からは北方四島の問題も提出されているし、日本の地図にはその四島は日本の色になっています。あとの南サハリンとか千島はグレーゾーンで、ロシアの領土ではないということで、お互いに非常に感情的になってその問題を論争していますから、歴史の事実を教えなければならないのではないかと思います。その歴史の認識があまり正しくなければ、これは大変なことです。これによってまた戦争になるということもありますから、それはどうしても避けなければならないのです。

司会 ありがとうございます。補足的なご発言やご質問があればということですが、いかがですか？ はい、じゃあ簡単なことであれば、ひと言ということですね……。

質問者 法政大学の加納と申します。先ほど司会者の方から問題が出ていたのですが、戦争が避けられたのか避けられなかったのかという問題です。その関連で、私は質問をしたいのです。戦争が避けられなかったのはなぜか、という問題を考えてと思います。ニコライ2世の問題というものがありません。ニコライ2世という方は自分の意志をなかなか定められない人だな、と私は思います。その上で質問したいのです。

これは別の機会に和田先生に質問したことがあります。日口交渉の最後の段階で、ロシアは完全に日本に妥協するわけです。妥協するというのは、基本的には朝鮮を渡すということです。中立条項も表の条約からは引っ込めるという妥協をしました。満州に関しても、これは諸国の権益を認めるという妥協案を出しました。これがロシアから日本に送られたが、電文が日本に着かなかったということになっています。これをどう考えるべきか。

そこで受け取らなかったと日本が判断して、ローゼンは2月7日に受け取るわけですから、日本は意図的に電文を遅らせたということが明らかです。結局、戦争は最後の段階で回避できたのか、それとも回避できないというところで小村はあらかじめ決めて半年間交渉したのか、戦争に至るプロセスが、私は非常に気になります。

日口は1903年の夏から半年間交渉するわけです。最後の段階で妥協できる案だったかなと思いますが、それは結局意味がなかったということです。これはサルキーソフさんにも関連する質問です。

司会 もう時間がありませんので、サルキーソフ先生、答えられる範囲でお願いします。

サルキーソフ 加納先生ありがとうございます。特に、和田先生に少し批判されたのですが、私の尊敬する大先生なのです。ただ、「戦争にみんな反対していた」という発言ですが、もちろん、みんな反対していたのですが、故意ではなくて、交戦派とか妥協派というのはどこまでか、ということなのです。交戦派は朝鮮を譲ってはいけないということを言っていたのです。だから、妥協を潰してしまったのです。

皇帝の意思は、適当に交渉していたローゼンとかの連中には伝わっていないのです。というか、伝わっていたのですが、彼らが実現しなかった、ボイコットしていたのです。これは失敗です。これが戦争の一番大きな原因です。彼は朝鮮を完全に日本にあげてもいいと言っていたのです。ただ、ローゼンは最後までそうではなくて、「中立地帯を作りましょう」ということでした。南だけ日本にあげてもいいのですが、北の方は中立地域にしましょうと。

歴史には「もし」という言葉はないのですが、しかし、チャンスはあったのです。チャンスはあったのですが、見逃されたというか、明らかに外交の失敗というか、それは皇帝の最後の責任です。

彼の意思は適切に政治に伝わってこなくて、戦争になったのです。日本は最後まで待っていた。戦争を準備していたのですが、待っていたのです。

司会 分かりました。じゃあフィリモノヴァさん。

フィリモノヴァ その戦争を回避することは不可能でした。なぜかと言うと、日口関係だけで検討するのは、ちょっと狭い視野になるからです。もっと幅広い視野から見なければなりません。あの時から、19世紀の末期から、全世界は第一次世界大戦に向かって着実に進んでいたのです。だから日口戦争も大きな脈絡の一環であったということです。その戦争をどうしても避けることができなかったということです。

私は98年のロシアによる旅順の獲得が、やっぱり、ポイントだと思います。交渉では回避できなかったのだと思います。

司会 議論が佳境に入ってきたところですが、予定していた時間になりました。まだ、いろいろご意見やご質問がোধりだろうと思いますが、このへんで終わりにさせていただきたいと思ひます。

今日は国際シンポジウムということで、日本の報告者やコメンテーターだけでなく、外国からもお客様をお迎えしました。特に、フィリモノヴァさんはロシアからわざわざおいでいただきましたし、ソクさんも韓国からおいでいただいたということで、お2人に、まず感謝を申し上げたいと思ひます。同時に、今日の報告者ということで、貴重な報告をしていただきました。

また、日本におられる報告者の先生方、コメンテーターのお2人の先生、さらに坂本先生とサルキーソフ先生には通訳までしていただきました。特に、坂本先生には報告書の日本語訳ということで、大変ご苦勞をおかけしました。感謝の言葉を申し上げたいと思ひます。ありがとうございました。本日のサルキーソフ先生のご報告では、日口関係は今、第5段階で、大きな係争問題はないというお話でした。ただ、日口で言えば北方領土問題がありますし、日韓でも歴史認識の問題など、いろいろ複雑な問題が横たわっています。

しかし、こういう機会を通じて相互理解を深めていく。日口関係で言いますと、日口戦争は150年間の平和の中での一時的な戦争状態だったということで、お互いに相互理解を深めて真の友好関係を作っていくための過渡期としての第5段階ということでご理解いただき、また、そのような形で日口両国および韓国を含めた東アジア全体の平和と友好の発展のために、本日の「日本とロシア—戦争の100年、平和の150年」という大きなテーマのシンポジウムが役に立つことを願ひまして、ここで幕を閉じさせていただきたいと思ひます。どうもありがとうございました。